

特別展 「ポンペイ」

東京国立博物館 22. 01. 14～04. 03 京都京セラ美術館 22. 04. 21～07. 03
九州国立博物館 22. 10. 12～12. 04 宮城会場の開催については詳細未定。



イタリア・ナポリ近郊「ポンペイ」は、ローマ帝国の都市として繁栄していたが、紀元後79年にヴェスヴィオ山の大規模噴火が発生し火山噴出物に飲み込まれた。

火山灰で埋没した古代の居住地には、当時の人々の生活空間と家財が閉じ込まれているため、18世紀から現在に至るまで発掘による調査が継続で実施されている。

本展は、ポンペイ遺跡の膨大な遺物を収蔵する「ナポリ国立考古博物館」の収集品から、多彩な発掘品を通して日本初公開を含む「約150点」を紹介している。



描かれている「モザイク画」は、芝居に使われている仮面であるとされるが、その仮面を使って演じられた芝居のファンが作らせたものか、あるいは芝居を演ずる俳優のものかは不明とされている。古代時代の芝居は、神様に捧げられたとされるから、宗教的なモザイク画であったのかもしれないとされる。



《ボックスとヴェスヴィオ山》は、ポンペイから出土された「百年祭の家」の神棚の一種であるララリウムに描かれていた作品で、画面中央には「ヴェスヴィオ山」を、麓にはブドウ酒の神「バックス」が立っている。

展示品はカメオ・ガラスと呼ばれる技法で制作された《青の壺》などの宴席を飾った品々、教養人であることを占めそうとした家財や装飾からは、発掘資料の実物ならではの魅力を楽しむことができる。

更に、当時のポンペイ遺跡の3軒の邸宅に注目し、会場内に邸宅の一部を再現し、ヘレニズム美術屈指のモザイク装飾が残される「ファウヌスの家」、ローマ文化が黄金を迎えたノロのフレスコ画「堅琴奏者の家」や「悲劇詩人の家」を取り上げて、ポンペイの歴史をたどることができる展示は、当時のポンペイの人々の生活の様子が見られる出土品も展示されているので興味深い。